

名古屋鉄道・犬山線

[枇杷島分岐点信号場～
新鵜沼]

愛知県と岐阜県に総営業距離約445kmの路線網を擁する名古屋鉄道。

犬山線は、名古屋市と県北部のベッドタウンを結ぶ。

犬山線に乗って、観光都市として名高い犬山市を訪ねてみた。

名古屋市と県北部を結ぶ

名古屋鉄道は愛知・岐阜2県にどつかと腰を下ろし、「名鉄」という略称で庶民の足として親しまれている。明治27年の創業以降、20数社におよぶ地元鉄道会社との合併集合によって生まれた民鉄では日本第3位の路線長が、めざましい発展を続ける中部経済を支えてきた。

今回は名古屋と県北部の観光文化都市犬山市を結ぶ「犬山線」に乗ることにする。これまで行くチャンスに恵まれなかった「犬山城」と「博物館明治村」を、初秋の空気のなかでたつぷり満喫してみたいと旅心がときめいたからだ。

名古屋駅前地区は、ここ数年の超高層ビル林立ですっかり様子が変わった。そのど真ん中にある名鉄百貨店でドリンクと菓子を入手して、地下売り場から名鉄名古屋駅のコンコースに入る。犬山線は名古屋本線の庄内川を渡るとすぐの枇杷島信号場が起点だ。昔の「枇杷島橋駅」の跡、江戸時代は美濃路（東海道と中山道を結ぶ脇街道）の道標があったところで、枇杷島市、小田井の市と呼ばれる青物市で大層にぎわっていた。尾張城下への物資のうち、木綿は知立の市、海産物は熱田、そして青物のほとんどを一手に引き受け、ここからの犬山線沿いは肥沃な穀倉地帯が広がっていた。いまは名古屋交通局の地下鉄・鶴舞線が上小田井駅に接続していて、名鉄との相互乗り入れが実現。犬山線から鶴舞線、赤池駅から豊田線へと都市利用が格段に便利となったため、上小田井駅から先の沿線にはマンションや新興住宅が建ち並んでいる。

江戸時代の町並みが残る、尾張の小京都。

小牧長久手の合戦で秀吉が犬山城に

特急が停車する「江南駅」も江南団地が広がるベッドタウンだが、江南とは、大河の木曾川から南にある町というのが語源らしい。25分ほどで「犬山駅」に到着。名鉄の小牧線や広見線ともここで接続するが、隣駅の「犬山遊園駅」まで足を延ばした。ホームの頭上におサルが描かれた可愛いモノレールがあつて、遊園地と世界サル類動物園「日本モンキーパーク」に直行できる。

駅から歩いてすぐ北側にはゆつたりと木曾川が流れていて、日本ライン下りも鵜飼の船乗り場もここ。川面に浮かぶ小舟の群れを横目に10分も歩くと城前の広場についた。尾張の小京都と呼ばれるだけに史跡や神社仏閣が多く、古い町並みがノスタルジックな懐かしさを漂わせている。国宝の**犬山城**は天文6（1537）年に織田信長の叔父信康によって建立された城で、またの名を「白帝城」と呼ぶ。小牧長久手の合戦で豊臣秀吉が12万余の大軍を率いて城に入り、小牧山に陣をしいた徳川家康と戦ったことで有名だが、国宝のなかでは日本最古といわれる天守閣4階への急階段をのぼっていくと木曾川から濃尾平野の眺望が開ける。晴天なら遠く名古屋のビル群を望むこともできる。城から下りて濃尾の総鎮守「針綱神社」を参拝。桜花爛漫の4月に催される犬山祭には、高さ8メートル3層の車山13輛が、「奉納からくり」を演じながらねり歩き、夜ともなると万灯で飾られて夜空に浮かび上がるという。

城前広場の観光案内所で旅情報入手して「か



からくり人形細工や茶運び人形の実物が見られる
からくり展示館。



豊臣秀吉が生まれた1537年に、織田信長の叔父信康によって建立された**犬山城**。



文・島 実蔵 (ジャーナリスト・作家)

text by Zitsuzoh SHIMA

(社)日本ペンクラブ会員、企業フォーラム会員。著書に『大坂堂島米会所物語』(時事通信社)、
『タイムスリップ in 浪華』(飛鳥書房)ほか。

写真・生田由美子

photographs by Yumiko IKUTA

らくり展示館」を訪ねた。九代玉屋庄兵衛氏の

からくり人形細工の実演や、おなじみの茶運び人形の実物も見学できるし、実際にからくりの仕掛けを体験できるのもうれしい。「犬山文化資料館」に入るとホールには犬山祭で曳かれる車山2輛が展示されていて、旧犬山城主の成瀬家伝来の貴重な歴史史料が拝観できる。

午前中は城下町を散策し、犬山駅までもどつて「博物館明治村」行きのバスに飛び乗った。全部を見るだけでも1日では足りないよ、と案内所のお姉さんにニコリとされたからだ。

博物館・明治村を探访

維新の夜明けが鎖国の岩戸をこじあげ、数条の光が文明開化の大輪の花を咲き誇らせた。欧米の文物や制度が流入し、石や煉瓦造りの多くの洋風建築が世の中の変化を体感させたに違いないが、美しい明治建築も時代の流れに抗するすべはない。震災や戦災などで多くを失い、戦後の都市開発が終焉に一層の拍車をかけて取り壊される運命がせまった。ところが保存を求める声が急速に盛り上がってきたのだ。

入鹿池湖畔の豊かな自然のなかに博物館明治村が開村したのは昭和40年3月のこと。解体予定の建造物の中から選んで順次移築復元を行った。開村当時は札幌電話交換局や京都聖ヨハネ教会堂、森鷗外や夏目漱石の住宅や電車などの施設物15件に過ぎなかったが、いまでは67件に達し、敷地も2倍近くの100万平方メートル(東

明治という時代にタイムスリップする。

京ドームの21個分)に広がっている。

正面玄関で「乗物1日券」付きの入村券を購入。推奨のコースとして1丁目から5丁目までの各ガイドツアーコースのほか、重要文化財コースの1・5時間から、まるごと明治村コースの4.5時間(歩行約7キロ)まであるが、まず村営バスで最初に一周しておき、あとからお気に入りの建物をじっくり楽しむ。これが大人の知恵だと観光案内所で教えてもらったのが役立つ。乗物1日券で10分間隔のバスに乗ると路線の建物紹介がテープで流れているし、SLや市電も乗り放題だから間違いなくお得だ。

正門からのバス終点はロイド・ライト作の帝国ホテルの玄関で、写真でしかみたことがなかったから感動、感激。お腹がすいたので洋食屋「浪漫亭」の客になる。お薦めのカレーライスは激辛ではない柔らかな味で、特製スープともびつたりの明治の味だった。ちなみに明治村食堂など4カ所で食事ができるし、喫茶店や汐留バー、コロッケやカレーパンの販売店もある。

明治時代の蒸気機関車に乗り、京都市電のレトロ色にも満足。宇治山田郵便局では10年後の自分宛の手紙(はあとふるレター)も預けてもらえる。執筆業の端くれとしては「夏目漱石」「森鷗外」「幸田露伴」「小泉八雲の避暑の家」は見落とせないの

で自然に足が早くなった。気がつく腕時計は閉園の午後5時を指している。聖ザビエル天主堂が薄暮の空にシルエツトになって浮かんでいた。近いうちにもう一度チンチン電車に乗りこくことになりそうだ。



夏目漱石の家。
明治時代の典型的な中流住宅。



明治文化を今日に伝える博物館
明治村。